男性の性的社会化

副田義也

はじめに

一般的にいって、男性の性的社会化の過程を全体的にとらえようとするとき、観察の材料とされるものの範囲は、性的存在としての男性をどのようなものとして規定するかによって定まる。その規定は、あらためていうまでもなく、時代と社会によって変動する。現代の日本社会のばあいでいえば、性的存在としての男性には、すくなくとも、三つのアスペクトが区別される。それらは相互に完全な独自性をもっている訳ではなく、境界領域ではかなり重複しあうのであるが、それでも、区別されて論じられる必要性があるようにおもわれる。その三つのアスペクトはつぎのとおりである。

第一、性的関係における男性。これは、狭義の性的存在としての男性である。精神分析学の用語をもちいるならば、性対象にたいする関係における性目標に向けられたリビドーの持ち主としての男性といってもよい。つまり、性的欲望をもち、それを充足し、あるいは抑圧する行為を、性対象としての他者、事物、観念にたいしておこなう男性である。また、社会学、文化人類学、心理学などで最近よくつかわれるようになった用語によって、セクシュアリティ（sexuality）としての男性という表現もかんがえられる。このセクシュアリティにはいまのところ適切な訳語がみいだしがたいので、英語をそのままつかうのであるが、それはさらにセックスとジェンダーに区別される。男性のばあいでいえば、このセックスは、性的交渉をおこなうことやその結果として女性を妊娠さ

せることをさし、ジェンダーとは他者などを性的に愛すること、男らしく振舞うことなどをさしている。

第二、性別役割分業における男性。これは、女性との分業関係における男性である。マルクス主義理論の用語をもちいるならば、分業は一般的には労働の異質種類への分割である。その分業の諸形態のひとつとして、生業労働あるいは職業労働と家事労働の分業がある。性別役割分業とは、その分業の担い手を性別によって固定化したものであり、男性が生業労働を、女性が家事労働をうけもつ。これは典型的には家族集団における夫と妻の分業関係にみいだされるが、そのヴァリアントは、職場集団、企業、地域社会、さらには社会的分業の体系において、男性が基幹的で主要な労働をおこない、女性が補助的・第二義的な労働をおこなうという分業となっている。性別役割分業は女性差別の源泉のひとつである。その分業のもとで、男性は生業労働をおこない、家事労働をおこなわず、それをおこなう能力を欠き、女性を劣等の存在として差別する。

第三、父系制社会における男性。父系制の原基形態は父系家族にある。これは父系をたどって子どもたちの集団所属が決定される家族集団の型である。この家族では、子どもたちは父親から地位や権利を継承し、また父親の権威のもとにおかれる。父系家族において男性は、父親であるか、やがて父親になる存在である。かれは結婚をすると妻の姓をかれの姓に改めさせ、彼女が子どもを産むと、その子どもにもかれの姓を名乗らせる。かれが住むところに妻と子どもたちがいっしょに住むのが一般的とされる。父系家族が家産をもち家業により経済的に維持されるばあい、家産の管理者、家業の指揮者としての家長、父親の権力、権威がきわめて強力である。この父権が身分的に制度化されたものが父権制あるいは家父長制であり、そこでは男性の女性にたいする、家長の家族員にたいする優位が社会全体に浸透する。父系と父権は女性差別のもうひとつの源泉である。それらによって、男性は、家父長として権力、権威をもつか、家族員としてそれに恭順し、女性を劣等の存在として差別する。

あらためていうまでもなく、性的存在としての男性のこれら三つのアスペクトの記述は、性的存在としての女性も、性的関係、性別役割分業、父系制社会のそれぞれにおいて規定されることを示唆している。以上で男性のばあいをもっぱら記述したのは、本稿の課題を説明するために必要最小限の概念規定をおこなうにとどめようとしたからである。

また、冒頭に述べた三つのアスペクトのあいだの重複は、以上の具体的記述に即して例示されることができるようになる。たとえば、性関係における男らしさの条件のひとつは、性別役割分業における生業労働への固定化である。男らしく働いて妻子を養う。また、その固定化が、父系制社会で男性がもつ権威が次第に形骸化してゆくときに、その梃子入れにつかわれる。さらには、父系制社会の男性の権威が性関係の男らし

さにも通じる。結婚することを意味する、男性についてこい、女性がついてゆくという表現。

しかし、また、それらの三つのアスペクトのあいだの相対的独立性についても、以上の記述から証明が可能になる。私は、最近、NHK世論調査部が一九七三年、七八年、八三年におこなった「日本人の意識」調査の結果によって、価値意識レヴェルでそれを試みた。すなわち、性関係では、婚前交渉を容認する比率が、三つの時点で急増している。七三年、三七・五%、七八年、四六・五%、八三年、五〇・四%。性別役割分業では、それを否定し、たがいに自立した夫婦関係を理想とする比率が、三つの時点で微増している。七三年、一四・五%、七八年、一六・〇%、八三年、一六・一%。父系制にかんしては、結婚したさいの改姓について、夫婦が別々の姓のままでよいの比率は、三つの時点ではほとんど変化しない。七三年、二・九%、七八年、三・二%、八三年、三・三%。以上から判断して、三つのアスペクトのそれぞれについての意識は相対的に独立性がたかい。

さて、社会学とその関連領域で子ども期、青年期の性的社会化が課題とされる例が最近めだって多くなってきた。それらの大部分は、性別役割分業意識の形成過程を解明しようとしている。その意識が子ども期、青年期をつうじて、学習され、内在化される過程を調査・分析することに、研究者たちの関心の多くが集中しているのである。このような関心のありかたは、あらためていうまでもなく、昨今の男女平等思想の強調が影響している。ウィメンズ・リブの運動、国際連合による国際婦人年の設定、男女平等のための世界、国内、さらには各地方自治体レヴェルの行動計画の作成などをつうじて、男女平等の実現を妨げる主要条件のひとつが性別役割分業であることが広く認識されてきた。しかし、現代の日本人の多数部分は、現実の生きかたにおいても価値意識においても、さきに示したように、性別役割分業を肯定・支持している。男女平等の実現のためには性別役割分業が解消、克服されなければならない。このような応用社会学的な観点からの問題の設定のしかたにより、さきの研究状況がもたらされているのであろう。

しかし、性的社会化の全体像をかんがえるとき、性別役割分業意識の成立過程は、その一局面でしかない。その全体像は、すでに述べたところを利用していえば、性関係、性別役割分業、父系制社会のそれぞれにおける男性と女性の性的社会化により構成される。最近の性的社会化の研究において、性別役割分業が好んでとりあげられているということは裏返していえば、性関係における性的社会化、父系制社会における性的社会化が、はなはだしく軽視、無視されているということでもある。この状況をもたらしている基本的要因の一部としては、性的社会化の研究に従事する人びとの性関係についての関心の弱さや偏見、女性差別についての認識の一面性などがあるとおもうが、いまはそこには深入りしな

い。私自身の判断のみをいえば、このような状況にバランスの回復の必要を感じてきており、そのために私にできそうな仕事として、ここでは性関係における男性の性的社会化を研究課題にえらんでみたのである。

研究方法は、いまのところ、つぎのとおりである。成人と青年の男性を調査対象として、幼年期のさかのぼりうるもっとも早い時点から青年期の終りとみなす二五歳までのあいだで、性的欲望、性にかんする関心、知識、空想などの出現と変容の過程、性器や性感帯が存在する身体部位にかかわる諸行動の開始と変遷の過程、さらには性愛についての諸感情の発生と推移の過程を回想してもらう。この回想は、インタヴィュウァーとインタヴィュウイーが、それらの主題についてそれぞれに回想し、語りあうという形式でおこなわれた。会話はテープ・レコーダーで録音され、のち文章化され、各個人ごとにまとめられた。それは端的にいえば、男性の子ども期、青年期の性生活史である。そのなかで、性的人間としての自立的諸能力がどのように形成・獲得されていったか、その過程にどのような諸条件がどのように作用したか。そのあたりに焦点をおいて、ききとりと対話はおこなわれている。

性的人間としての自立的諸能力とは、この研究の前提的価値である。私がうけいれる価値意識によれば、その諸能力のなかには、異性との性器結合によって性的交渉をおこない、性的快楽を体験し、満足や幸福感を味わう能力がふくまれる。その能力の開発のために、子ども期や青年期の「手によるセックス」＝マスタベイションは、適当な訓練の機会のひとつである。ここでいう性関係における性的社会化とは、たとえば、その能力の形成であり、マスタベイションの習熟である。

しかし、私たちの社会では性愛にかんする価値意識は、はなはだしく多元化している。伝統的な価値意識も根づよい。まえのパラグラフで書いた程度の判断でも、それを読めば「しかし」を連発したくなる人びとが多くいよう。性的交渉により快楽を経験する能力にたいしては、しかし自制心が必要だ、しかし結婚まえにはその能力の開発は必要ではない。マスタベイションが性的社会化の機会のひとつであるということにたいしても、しかし過度にわたるのは好ましくない、などなどである。性関係における性的社会化を論じるさいの困難のひとつは、なにが社会化であるかについて、統一的で安定した見解が容易にえられないことである。その点、性別役割分業における性的社会化では、すくなくとも「タテマエ」の次元では、伝統的価値意識が否定され、男性も家事労働の技術を身につけるべきであるとか、女性も職業労働の能力をもつべきであるとかいうところでは、比較的広い範囲で一致している考えかたがみいだされる。性的社会化の研究のなかで、性別役割分業におけるそれが偏重される理由のひとつはその辺にもあるのだろう。この状況のなかで、さきにいった性的人間としての自立的諸能力の全体をここで子細に規定する試みは、生産的なものになる見通しが成立しない。私は、さしあたってはその諸

能力を、目下、日本社会で進行しつつある性の解放化を支持、肯定する方向でかんがえるというようにゆるやかに規定し、以下の研究がひとおり終ってから、いま少し具体的な規定をおこなうことにしたい。

現在、ききとりが完了している調査対象は五例である。以下では、それらのうちの三例を紹介・分析する。そのうえで、それらにおける発見を整理するところまでを、ここでの仕事としたい。なお、ひきつづいては、その整理にもとづき、この主題にかんする大量観察をもおこなう予定である。

A氏の事例

性器結合にかんする社会化(1)

A氏は一九三四年生まれ、調査時点では四六歳であった。精神分析の知識が多少あり、子ども期の回想に長じる。

Aが、性欲、性器にかかわるかれ自身の記憶で、さかのぼりうるもっとも早い時期に属し、鮮明なものは、戦時中、福岡県小倉市の国民学校（現在の小学校）二年生のとき、教室で授業中に性器をズボンから出して、もてあそんでいるところを、隣りの席の級友に見咎められたときのことである。かれは、唾液を指先につけ、勃起したペニスの亀頭の部分の包皮に塗っていた。級友はそれをみておどろき、顔面を紅潮させて、「うらんしか、うらんしか」（汚いという意味の方言）といいながら、体を遠ざけようとした。Aは困惑し、自らも「うらんしか、うらんしか」といいながら、相手と同じ動作をしたのを記憶している。

まもなく、Aはマスタベイションを覚えた。さきに記したいたずらをくりかえすうちに性的快感に達したのがきっかけである。その方法は、唾液をつけた指先で、ペニスの包皮をこすって包皮ごしに亀頭を刺戟し、快感に達するというものであった。快感の性質はのちに経験した射精時のそれと同一であったが、当時はまだ射精はなかった。マスタベイションでそれをはじめて経験したのは、国民学校四年生のときである。マスタベイションを覚え、それがすぐに習慣となったのは、国民学校二年生のときのことだと記憶している。Aは、中学校の生徒であったころから高等学校の生徒であったころにかけて、早くからはじまった自らのマスタベイションの習慣が、自らの性器の発育を妨げ、成人したのちの性交がうまくできなくなるのではないかという不安感、恐怖感を味わっている。そのさい、国民学校二年生からはじめたという事実を、後悔しつつ何度も想い浮べたので、さきの記憶が残った。ついでにいえば、マスタベイションで罪悪感を覚えたことは、すくなくとも記憶にはない。

マスタベイションは、夜、蒲団に入ってからおこなった。そのさい、国民学校三年生のころであるが、Aが、くりかえしおこなった性的空想がある。空想の主人公は、当時の年齢の子どものかれ自身である。かれは、近海の無人島の洞穴に住んでいる。かれは、美しい女教師をひと

り、あざむいてそこに連れてゆき、裸にして縛り、閉じこめている。彼女は肉付きのよい軀をしている。洞穴のなかで明りはろうそくの灯によっている。その明りに照される女性の白い大きな軀は視覚的イメージとして後年まで残った。彼女はときには天井からつるされたりしている。主人公の子どもは、米を一俵、鍋・釜などの炊事道具をもってきており、かゆをたいて食べる。護身用に竹槍を一本もっており、それで、犠牲の軀をついて傷つけ、脇腹などの肉を削ぐことがある。削ぎとった肉片をかゆといっしょに煮て食べる。

くりかえされた空想であるから、いくつかのヴァリアントがある。あざむいて連れてゆく女教師は二人のばあいがある。持参する炊事道具や食糧の種類がさきにいったものより増すこともある。竹槍で犠牲の女性を傷つける方法はさまざまに工夫され、その工夫は楽しみのひとつであった。

空想のなかで、あざむいて連れてゆく美しい女教師は、現実では、かれが通っている国民学校で一年生から三年生まで、かれの学級の担任教員であった。彼女は良家の娘で、師範学校を卒業してはじめての勤務で、かれが一年生のときの学級を担任した。彼女は熱心に授業をし、生徒たちのあいだで人気が高かった。かれも、教師としての彼女が好きであった。かれは成績は比較的よい方で、図画と作文の才能はとくに抜きん出ていたが、体操は不得手であった。かれは、彼女がほかの教師にかれの画才を賞めているのを聞いたことがある。かれの作文を、彼女から、上手だが、あなたならもっと上手に書けるはずだと、批評されたことがある。また、体操の時間に、実技がいやで、ちょっとした怪我を理由に見学を申し出て、かれは、彼女から軽い蔑みのいろの目差を向けられて許されたことがある。しかし、概していえば、かれは先生のお気に入りの生徒たちのひとりであった。

日中、たとえば授業をうけながら、かれが彼女を性的関心をもち見守っていたというような記憶はない。さきに述べたような空想をするくらいであるから、そのような事実がときにあったのではないかと考えられるが、記憶にはともかくない。空想のなかであざむいて連れてゆくことがある、いまもひとりの女教師は、かれが通っている国民学校に併設されていた青年学校（？）の教師で、化粧がとくに濃いと生徒たちのあいだで噂されていた。かれは廊下でその女教師とすれちがって、その化粧や服装の派手さを意識したことが何度かあった。

さきの空想のなかの場面設定や小道具、かれの行為などには、時代の影響が多くみいだされる。かれがこの空想にくりかえし耽ったのは、一九四三年のことである。洞穴の生活は、それから一、二年のちに日常的になる防空壕の生活が書物、雑誌などで描かれており、そのイメージによっている。かまどを築いて、鍋・釜で煮たきをする仕事は、Aが国民学校四年生になったときには、家族のなかで両親およびかれの仕事にな

っていた。かゆはとぼしい食糧を食いのばすためにとられがちな米のたきかたであった。また、竹槍は、当時、銃後の国民の武器として、もっともポピュラーなものであった。

性器結合にかんする社会化(2)

子どものマスタベイションと性的空想は、かれがそのときまでにもつようになった性的欲望の性質、性についての知識、性にかんする行動能力、つまり性関係のための性的社会化がどこまで進んでいるかを私たちに教える。さきの記述から、国民学校低学年時代のAのばあいでは、さしあたっては四点があきらかである。

第一。精神分析学のタームをもちいるならば、さきの性的空想のなかで、性対象は成人女性の肉体に特定されている。この特定化がなにによって成立したのかはあきらかではないが、その事実自体は、欲望・知識などにおける性対象の選択ではかれが、部分的には年齢不相応に社会化されていたのを、あるいは過度に社会化されていたのを示唆している。または、性対象を成人女性とするというかぎりでは、かれの性的社会化は完了していたといってよい。ききとり調査から判断するかぎり、男性は子ども時代の性的空想において、性対象を同年代の少女とするタイプと、成人女性とするタイプとがあり、Aは、あきらかに後者のタイプに属していた。

国民学校二、三年生のころ、かれは、母親が幼い弟妹と添寝をしている蒲団に後からもぐりこみ、足の裏が母親の臀部にふれて、その滑らかな感触に性的な快さを感じたことがある。これも、かれが成人女性を性対象としてみていたことの例証のひとつであろう。しかし、それは、ときには、小さい子どもとしてのかれ自身と、大きい成人の相手とは、さしあたっては切り離された存在同士であるという感覚をともなった。かれの父親は、そのころキリスト教関係の書物を主要に販売する書店の雇われ経営者をしており、あるミッション・スクールの女学校の教科書を一手販売していた。その販売日、店内は女生徒たちで雑踏する。かれは彼女たちのあいだをうろうろし、床を這ってスカートの内側をのぞくことを試みたりしながら、成人に近い体格の少女たちの大きさ、それにたいする自らの小ささを、つよく感じていた。それは、自己が成熟した性から断絶された存在であるという感覚であった。

後年、かれは、J・スウィフトの『ガリヴァ旅行記』の第二篇「ブロブディンナグ（大人国）渡航記」を読み、そこで、巨人の美女が描かれる手際に、このときの記憶をよみがえらせた。スウィフトは、小人の主人公からみた彼女たちの肌のきめのあらさ、ほくろに生えている毛は太いひもほどであること、巨大な乳首の醜さ、ついには排泄時の水しぶきの轟音まで書いてしまっている。そこには伝記作家によれば一時期性的不能者であったと伝えられるスウィフトの、成熟した性にたいする断絶

感、それゆえの反撥とそのかげにひそむ憧憬がよみとれる。かれは、子どもであったかれの心理と、『ガリヴァ旅行記』の作家の心理に、ある親近性を感じた。それは、性的未成熟と性的不能の親近性に基礎づけられるものであったのであろう。

第二。性目標についての社会化の到達点のひとつが、自らの性器を異性の性器と結合させ、性的快感をえて満足感、幸福感を経験することであるとすれば、さきの空想をえがきつつマスタベイションをおこなった子どものAは、自らの性器をもちいるという一点で、その社会化の過程の第一歩を踏み出していたということになる。すでに、マスタベイションは、性関係のための性的社会化の適切な訓練の機会のひとつであるといった。これをいま少し具体的にいえば、子どもたちがマスタベイションをはじめることは、かれらが肛門器から性器期へ移行する契機のひとつであるとかんがえられる。マスタベイションのおそい開始は、長すぎた肛門期とそれゆえに形成される性格特性のいくつかがあることを示唆する。

第三。しかし、性目標にかんする社会化では、子どものAには学習すべき多くの事柄が残されていた。次項で述べるように、そのころ、Aは、性器結合による性的交渉があることは知っていた。また、かれは、その交渉において、男性の性器がどのような役割をはたすかについておおよその見当をつけていたが、女性の性器については正確な知識をもっていなかった。母親の偶然の不注意から彼女の性器を目撃したことがあり、排泄孔と生殖孔が別のものではないかと疑うことまではあったが、女性の生殖孔とそれ自身については知識をまったくもっていなかった。性的交渉は、男性の性器と女性の性器の排泄孔の結合であろうと想像されていた。

第四。しかし、性的空想のなかで、Aは、犠牲の成人女性とかれが理解するかぎりでの性器結合による性的交渉をおこなわず、その女性にたいする傷害と食人をおこなっている。この異性との性的交渉の様式には、かれが肛門期のサディズム、口唇期の相手を食べることへの執着を残存させており、性器期に充分に進んできていなかったことを示唆する。

しかし、このばあい、精神分析学のタームによる説明は、都合がよすぎるという気がしないでもない。別の角度からの説明が併用されてもよいのではないか。たとえば、傷害の空想には、当時の、職業的殺人者としての軍人への崇拝、大量殺人としての戦争への讃美などが投影しているのではないか。食人の空想には、当時のすでに慢性的に日常化しはじめている飢餓状況が投影しているのではないか。さきに述べたように、竹槍やかゆのイメージは、時代状況が空想のなかの傷害、食人の方法に反映していたことを証明している。しかし、傷害や食人という行為それ自身の空想にも、時代の社会心理はその成立を促すという事情があったのではないかという仮説をたてることは許されよう。

子どものAの性的空想における傷害と食人は、口唇期・肛門期の性愛体制の残存のせいにせよ、それに戦時下の社会心理がもたらしたものがくわわったにせよ、そのようなものとして理解される。つまり、Aがそのように空想をすることは自然であり、正常であった。こののち、かれはこのような空想を抱いていない。それは成長の過程において、かれにこのような空想をもたせる、かれの内外の条件が解消していったということであろう。

ききとり調査のさいちゅうにAは、パリにおいて日本人留学生の男性が、オランダからの留学生である女友だちを自室で殺害し、その人肉を食したというニュースをきいた。犯人はひよわで子どもじみた体格の持ち主であり、性的未成熟を示す言動が多くあったという。Aは、このニュースと自分の子ども期の性的空想をつきあわせて、つぎのように語った。少なからぬ子どもが、性的空想のなかで人肉食をおかすのではないか。しかし、その後の生育歴のなかで、かれらは、その空想から解放されるための条件にめぐりあう。さきのニュースの犯人は、それらの条件に出会うことがなく、現実の人肉食にいたったのではないか。つまり、かれは、性的社会化において、正常な子どもであったが、そのまま、おとなになり、異常な成人になったという訳である。

性器結合にかんする社会化(3)

男性と女性が性器を結合させておこなう性的交渉については、それをさして子どもたちのあいだに囁きかわされていた方言、たとえば「ボボ」というような言葉を、Aは、国民学校二年生のころには知っていた。かれの一家は、かれが国民学校四年生の春に、北九州の小倉市から福岡市に移住したが、二つの土地のそれぞれで性的交渉をさす方言が三つ四つあり、その一部は同一であるが、一部はちがっているとおもったのを、かれは記憶している。

現実の性交の場面に出会ったのは、Aが国民学校三年生のときである。かれの両親は、国民学校生徒や就学以前の四、五人の子どもたちと同じ室に寝るのを習慣にしていた。ある夜、かれは眠りそびれていた。父親が母親にいうのが聞えた。「こちらに来いよ。抱いてやろう」。母親が彼女の寝床を出て、父親のそれに入ってゆく気配をかれは聞いた。それから、かれらは性交をした。寝室には明りがついていたかどうかの記憶はないが、Aは、両親の様子を見なかった。しかし、かれは聞くだけで、かれらが性交をしていることをはっきり理解した。

Aは、そのとき、性的交渉というものがあり、成人の男女はそれをするということは知っていた。しかし、かれは、それをかれの両親もするという事実をはじめて知り、ひどく驚き、うろたえていた。両親がよくないこと、罪にあたる行為をしていると、かれはかんがえた。Aは、キ

リスト教の神に、両親の罪を許してほしいと祈った。それから、とても心細くなり、それから逃れようとして、かれはマスタベイションをした。

この夜、Aが神に祈ったということについて、多少の注釈をつけておく。Aの父親は、キリスト教バプテスト派の牧師であり、かれが国民学校に入学するまでのあいだは、福岡県行橋町の伝道所ではたらいていた。そこが閉鎖されてからは、小倉市に移り住んで、さきに記したようにキリスト教関係の書物を主として販売する書店の雇われ経営者になったのである。Aの母親は牧師の娘であり、牧師の妻になった。この両親は篤いキリスト教信仰の持ち主であり、かれらの生活のほぼ全体をその信仰で律していた。Aは、かれらの許にあって育ったが信仰をもったことは一度もなく、国民学校に入学してまもないころから、宗教と科学は一致しない、自分は科学の立場にたつ無神論者であるといっていた。かれは、消極的に信仰をもてないというのではなく、両親の信仰にたいして、それは無知と弱さにもとづく信念だという挑戦的な態度をとりつづけてきた。かれは以後、現在にいたるまで一貫して無神論者であり、両親が信仰をもつことを許容する気持になったのは、二〇歳を過ぎてからである。

したがって、かれは、人間が神に祈るということを、そのときより以前から軽蔑していた。そのかれが、子ども時代に二度、神に祈っている。一度は、この両親の性的交渉の場面に出会ったとき、かれは、かれらのために祈った。いま一度は、それから三年後、米軍機による空襲のもと、焼夷弾が降り注ぐなかで、防空壕に退避するまえに、自室の押し入れのなかにいて、恐怖にかられ、かれは、家族の安全をねがう母の祈りに和して神に祈った。二度目の祈りの経験は、かれの自尊心をひどく傷つけた。自分は恐怖に負けて、存在するはずもない神に祈った弱い人間だ。しかし、一度目の祈りの経験には、そのような記憶がない。

両親の性交を一度知ると、その場面に出会うのを恐れて、Aは眠りそびれまいとし、早く眠ろうと意識しすぎることで眠れなくなり、ひどい不眠症にかかった。それは、かれの一家が福岡市に移住し、国民学校四年生のおわりごろ、かれが子ども部屋で寝るようになるまで、断続的にかれを苦しめた。

小倉時代の終りちかくであったとおもうが、Aは、母親が夜中に夢をみて泣き出し、父親にその理由を訊かれて説明していたのを記憶している。それにさきだって、かれらの一家にひとりの看護婦が下宿をしていた。彼女は母と同年代で、目鼻だちのはっきりした、大柄の女性だった。その彼女が別の土地に住むようになり、父親がたまたまその土地に出かけて、彼女と再会した。彼女は、彼女の住居に父親をまねき、宿泊してゆけといったという。帰宅した父親は母親にそのやりとりを告げた。その夜、母親は、かれを看護婦にうばわれた、あるいはうばわれそうになった夢を見て、泣き出し、目をさましたのである。夢の内容をき

いて、父親はいくらか困惑した口調で対応しており、母親は、看護婦が泊ってゆけといったのはひどいとなじる口振りであった。Aは、母親が、父親が性的誘惑をうけたとかんがえ、嫉妬していることを充分に理解していた。

四年生になってからAは、記憶しているかぎりで二度、両親の性的交渉の場面を目撃している。一度は、かれが便所にゆきたくて目覚め、起きあがったとき、両親が明りをつけた寝室内で性交をおこなっているのを見た。かれらは正常位で性交をしており、父親ははげしく腰を動かし、母親はかぼそい声をあげていた。Aは、そのときには、とくに驚いたり、ひるんだという記憶はない。やはり、こういう風にやるものかとおもい、かれは便所にいった。寝室にもどってくると、両親は並んで寝ていた。いま一度は、夜中にかれが起きあがると、両親が抱きあっていた。かれは寝室を出るとき、わざと物音をたて、かれらがあわてて離れるのを見てとった。

しかし、このころにも、Aには、両親が性交をするのを嫌い、それをさせたくないという気持があった。まだ、かれが弟妹たちや両親といっしょの寝室で寝ているころ、家族員のすべての蒲団を敷くのは、かれの仕事であった。最初のうち、その敷きかたは、父親の蒲団と幼児といっしょに寝る母親のそれを両端に敷き、それらのあいだに子どもたちが二人一組で入る蒲団を二枚敷くというやりかたであった。そのうち、父親がかれの蒲団と母親のそれを並べて敷くようにといい、それを母親がAにつたえた。父親は母親をかれのそばに呼びよせやすいようにとかんがえたのであろう。少なくとも、Aは、そう想像した。かれは、そこで、しばらくのあいだは両親の意向を無視して、かれらの性的交渉をできるだけ邪魔するつもりで、従来どおりに蒲団を敷きつづけた。かれは、父親がどうしてこういう敷きかたをするのだと訊き、母親がなぜかAがこういう敷きかたをするのですよと答えるのを聞いている。

性的結合にかんする社会化(4)

はじめて両親の性交の場面に出会ったさいのAの反応、および、それにつづくかれらの性交を目撃したり、予想したさいのAの反応からは、かれの性的社会化の特性や進行について、つぎの二点があきらかである。

第一。そのころ、Aには、性交を否定的にみる感性、価値意識が形成されていた。それは忌わしい行為であり、両親にしてほしくない行為であった。これはなにによってかれの内部に形成されたのであろうか。最初に両親の性交の場面に出会ったとき、Aは、かれらへの許しを神に祈っている。これは、両親のキリスト教信仰のなかに性交を否定的にみる価値意識があり、それがAにつたえられていたことを示唆する。

一般にプロテスタンティズムの倫理においては、性欲を充足させるた

めの性交は、それ自体としてはきびしく否定されている。性交は、神によって結婚を許された夫婦のあいだでのみ、子をつくること、不道徳な行為を避けることを目的として許される。性欲は夫婦のあいだにあっても罪悪とされる。これについては、ここではくわしく述べない。社会学文献におけるそのくわしい記述の一例としては、マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の第二章二「禁欲と資本主義の精神」をあげておく。また、プロテスタンティズムは、明治期の日本社会に入って、性にかんする禁欲主義的傾向をいっそう強めたのではないか。Aの母親の少女時代の回想によれば、牧師であったその父親（つまりAの祖父）は、映画館や芝居小屋のまえをとおるとき、看板などに性にかんする誘惑的表現が多いからといって、子どもたちに目をつぶって駈けぬけるようにと命じていたという。Aの両親のキリスト教信仰は、これらの本来的性格および日本的特性をもつプロテスタンティズムの倫理を受容しており、それを批判するものではなかった。

第二。子どものAは、一方で両親の性交を罪悪視しながら、他方で自らのマスタベイションを罪悪視していなかった。それは、かれが両親の性交の場面に出会って、神に祈ったあと、マスタベイションをしたところによくあらわれている。それは回想されるかぎり、両親の性交から性的刺激をうけておこなわれたのではなく、かれらの性交からうけたショックから逃避するためにおこなわれている。そのころのかれは、性交とマスタベイションを、同一の範疇、たとえば性行動に属するものとして理解していなかったようである。

性器結合にかんする社会化で、これ以後のAの主要課題、それは暦年齢でいうとかれのほぼ一〇歳からのちの主要課題ということになるが、それは、(1)女性の性器について正しい認識をえること、(2)性交を罪悪視する考えかたを抜け出して、それ自体が人間的な行為であるという認識をもつこと、(3)性交に習熟すること、などであった。

女性の性器についての知識は、中学校二年生のときに、不良じみた級友たちのひとりが、そのくわしい解剖学的図を描いて、Aに説明した。かれは、それで正確な知識をあたえられたのであるが、半信半疑というようなうけとりかたをした。それを確実な知識としてうけいれたのは、高等学校一年の冬、気が合う友人のひとりが同様の説明をしてくれてからのことである。

正確な記憶は残っていないのだが、多分そのころから、Aは、マスタベイションのやりかたを変えた。かれは、女性との性器結合による性交を空想しながら、蒲団を女性の軀にみたて、正常位の性交の動作でマスタベイションをおこなったのである。射精はしばしば蒲団を汚した。当時、Aは東京で下宿生活をして高等学校に通学していたが、休暇になると寝具をもって親許にかえり、それを母親に洗濯してもらわなければならない。かれは、蒲団のしみの意味を彼女がさとって、なにかいわれる

のではないかと恐れた。しかし、彼女は、その洗濯のあと、蒲団が汚れていたので洗うのが大変だったといっただけであった。

このマスタベイションのやりかたの変化は、Aが、マスタベイションと性交を同一の範疇に入れてかんがえるようになったことを示唆している。かれは、機会があれば早く性交をしてみたいとかんがえるようになった。しかし、性交を否定的にみる価値意識は、長いあいだかれに残った。プロテスタンティズムの倫理にもとづいて、それを罪悪視するような意識は一〇代の半ばには消滅していた。それにかわって、性交とは生理的必要をみたすためだけの行為であると即物的に、それをおとしめてかんがえる考えかたを、Aはとった。それは、愛情にもとづく性交という理想は仮構のものであり、現実にはありえないものだという判断をともなっていた。これは、そのころのかれの失恋体験と深くかかわっているようである。その体験については、のちに述べる。

はやく性交をしてみたいとかんがえるようになったころから、実際にはその機会がなく、Aは、つよい性衝動や女性の体への関心に苦しんだ。とくに、それは高等学校の在学期間にはなはだしかった。マスタベイションは、性衝動の生理的側面を一時的に解消するだけであった。性的な非行や犯罪となる行為あるいは、それらになりかねない行為をおこなうことで、それらの衝動や関心をみたそうかと、Aは何度かかんがえている。痴漢となる行為、幼女姦、友人の母親を性的に誘惑すること、親許に帰省したさい、そこに下宿していた女性に性交を迫ることなどがかんがえられた。主として自尊心と臆病さがかれの逸脱を防止した。くわえて、スポーツや受験勉強など熱中するものがあったことも、その防止にいくらか役立ったかもしれない。しかし、それらの条件だけで、かれは性的逸脱をまぬがれたのであろうか。後年になってからかんがえてみると、それらにいくつかの偶然の事情がかさなって、かれは逸脱の機会を辛じて避けたことが何度かあるようにみえる。いいかえれば、それらの偶然がなければ、かれは、一過性のものにせよ、性的な非行をおかしていた可能性がある。危うい時期を幸運に恵まれて無事に通り過ぎてきたものだという感がつよい。

性器結合にかんする社会化(5)

Aの最初の性交の体験は一九歳のとき、同性愛的傾向があった同年の男性とである。これは相手から誘われてのことであるが、Aは、相手の体を女性の体の代用にするような気持で応じている。記憶しているかぎりでは、かれに、抵抗感はなかった。しかし、同性との性交の体験はそれ一度だけで、のちにくりかえされることはなかった。この出来事には、当時の青年たちの一部にあった、同性愛を性風俗の新しいファッションのようにみなす傾向が影響していたのかもしれない。また、さきに述べたAの性交をおとしめてみる見方も、かれのこの体験の要因のひと

つになっているのかもしれない。さらに、かれには、わずかにではあるが同性愛者の傾向があるのかもしれないと、かれ自身がかんがえている。

この経験にわずかにおくれて、Aは、女友だちのひとりと性交を体験する。彼女との性的交渉は青年期いっぱい続き、ほかにAは二二歳のときから、いまひとりの女友だちとも性的交渉をもつようになった。かれと彼女たちの人間関係は、いずれもたがいにエゴイスティックな態度をぶっつけあうものであり、人間らしい、やさしい感情を入れるものではなかった。そのようなことになった基本的原因は、Aの側の、性交を生理的必要をみたすためにのみおこなうものだとおとしめてみる見方および、それと関連する性交の相手のエゴイスティックな選択である。

まず、かれは、性交をおとしめてみながら、子どもっぽい自尊心から、最初から自分を性的交渉のてだれと見せかけようとした。しかし、それができるはずもなく、青年期をつうじて、かれは、効果が充分にあがる前戯をおこなう方法を知らず、射精の時機をコントロールすることもできなかった。もちろん、それらが、最初からできないのはあたりまえのことである。しかし、四年も五年ものあいだで、それらについて見るべき進歩がなかったということは、なによりもAが、性的交渉を、相手を人間としてとりあつかい、やさしさやおもいやりによって、満足と幸福感にみちびく機会であるという認識をもたなかったことによっていよう。

Aの女友だちは、かれとの性交で満足感をえなかった。それについて、Aは、さきにかいた虚栄心から、恥知らずにも（後年のかれがインタヴィュウでいった言葉である）、女友だちのひとりには、彼女が性交が下手なせいだと仄めかしをときどきした。彼女は憤慨して、かれをベッドから追い出すことがあった。そのころ、Aは、バートランド・ラッセルの『結婚論』を読んだ。そこでラッセルは、性交を「男女がおたがいの軀をあのように懇ろなやりかたで利用しあうこと」と書いている。「懇ろなやりかた」という言葉から、Aは、かれの性交についての考えかたの偏向を示唆されていた。自分は、性交の相手の躯にたいして、たとえば、その性器や性感帯にたいして、そのように親しみ深い、そして丁寧な気持をもっていない。

このことと、Aが、最初に習慣的に性交をおこなう二人の相手をえらんだ選び方とは関連している。かれは、彼女たちを、身近にいて性交の相手になってほしいという申し出を受け入れてくれる可能性がたかいという理由だけで、つまり自分の性的欲望をみたしてくれる可能性がたかいという理由だけで、えらんだのであった。かれは彼女たちを愛していなかった。また、かれは彼女たちのパーソナリティに親しみを感じたり、好い印象をもつということもなかった。一般的にいえば、それらの感情のいずれかをもちうる相手と性交をするとき、青年はその相手の躯にたい

して、懇ろなやりかたで臨むことを学習しやすい。そのような感情をもつことが、そのようなやりかたをとることにとって、つねに必要条件であるとはかぎらないが。

それどころか、Aは、彼女たちのパーソナリティに、うとましさを感じることがしばしばあった。男女関係のつねとして、かれにそのような感情がはたらいていることを彼女たちは覚っていたにちがいない。しかも、青年期の終りちかくになると、Aは彼女たちとの関係を断ちたいとおもいはじめ、そのひとりからは結婚をのぞまれるのではないかと心配をしはじめていた。そのような心理状態のなかで、おそらくは多分にそのせいで、Aは、技術的にひとつも進歩しない性交を、彼女たちを相手につづけていた。

Aが、性交は人間らしい行為であり、人間的な関係であることを知ったのは二〇代の後半に入ってからのことである。ほぼ同時にかれは性交に習熟し、自分にも相手にも、満足感と幸福感をもたらせるようになった。しかし、それらは、このききとり調査が対象とする期間が終ってからのことである。

性的魅力にかんする社会化

性関係のための性的社会化の主要局面としては、以上に述べてきた性器結合にかんする社会化のほかに、性的魅力にかんする社会化および性的愛情にかんする社会化がある。紙幅と時間のゆとりをなくしたので、かいつまんで述べる。

Aは、国民学校の五年生の秋、同学年の女生徒のひとりの美貌を意識した。彼女は美しい少女として子どもたちのあいだでよく噂されており、かれも四年生のころからそれを知っており、彼女自身をも知っていた。しかし、かれは、その五年生の秋になって、はじめて彼女の美貌を魅力的なものとして意識する。かれが通っていた国民学校は、男子と女子とを別にしたクラス編成をとっていた。そこで、かれがその少女をみることができるのは、休み時間の運動場や講堂で全校の集会がおこなわれるときなどであった。かれは、遠くから彼女の顔をみて、その美しさにみあきることがなく、視線を彼女の顔からはずせず、無理をしてそれをはずしても、それはすぐ彼女の顔にもどってしまう。小説などで、美しさに目をうばわれるというのは、このことであったかとかれはかんがえた。

それ以前にもAは、男の子や女の子の顔をみて、きれいだとかととのっているという印象をうけたことはあった。しかし、異性の美貌を性的魅力として、つまり性的に引きつける力をもつものとして感じたのは、これが最初のことである。この感覚の出現については、かれの家族環境、とくに父親の態度が影響しているのかもしれない。父親は、他者の容貌について言及することが多く、とくに女性の美貌を賞めることが多

かった。これは、かれが少年時に、芝居小屋で物売りとして働く母親（Aの祖母）から育てられ、大衆芝居の世界になじんでいたことによっていよう。この父親のせいで、かれの家族は、他者の容貌を話題にすることが相対的に多かった。これは、その家族に出入りした知人や使用人の感想によって知られる。

Aは、中学校三年生のとき、次項で述べるように、同年のひとりの少女と出逢い、彼女に最初の恋愛感情をもった。それから数日して、かれは海岸に泳ぎにゆき、水着姿でボートに乗った彼女にあい、透けてみえる乳房の美しさに目を撲たれたような想いを味わう。それが女性の胸部を美しいと感じた最初の経験であった。かれは、その性的魅力については、それまで他者から示唆されたことがなかったようにおもう。それは、かれにとって、まったく新しい感情がいきなり出現したと感じられた。秋になって、Aは、街路をゆきながら、かれが若い女性の胸部を意識してみているのに気付いた。かれは、女性の性的魅力を感じとる自らの感覚が夏からのち変化したのだとあらためておもった。

Aが、つよくなる性欲と女性の体への関心に苦しむようになり、性交をはやくしてみたいと願っていたころ、かれは、女性の腰や臀部につよい性的牽引力をおぼえるようになっている。多分、高等学校二年生の春休みであったかとおもうが、Aは親許に帰省していた。かれは、下宿している成人の女性が、裸体になって浴室に入ってゆく後姿を、偶然にみてしまった。大柄の彼女の赤黒い裸体が浴室の湯気のなかではっきり見え、Aは、その幅広い腰とたくましい腿に、息をのんだ。かれは、その軀からつよい性的刺激をうけた。その夜、かれは、弟妹二人といっしょに、彼女と同室で寝ることになった。かれは、寝床にすわり、彼女に性交の相手になってほしいと頼もうかと真剣にかんがえた。かんがえながら、暗がりのなかで、かれは興奮のあまり、顫えていた。その気配を不審におもったのであろうか、彼女が、Aに、どうしたのかと訊いた。Aは、なんでもないと答えて、寝床に入り、なにもできなかった。

高等学校二年生の秋のことである。Aは、大学受験のため、一学期の終りにバスケット・ボール部を退部したのだが、そのスポーツをつづけたいという気持もあり、わずかな迷いがあった。それをつづけたいという気持の一部は、それによって女生徒たちの関心がひけるのではないかという期待によっていた。雨の日、Aは、学校にゆく道をあゆみながら、二、三〇メートルさきをゆく女生徒のふくらはぎの形と白さを美しいと感じた。彼女はバスケット・ボール部の女子部員だが、Aは、それまで彼女に格別の感情をもっていた訳ではない。しかし、Aは、スポーツをつづけていれば、あの脚の美しさを自分のものにすることができるかもしれないのに、とおもった。

それから、Aは、女性の容姿にかんして自分が魅力的に感じる部分が、上から下に段々とさがってきているとかんがえた。顔、胸、腰と腿、

そしてふくらはぎと足首。この感想には、いくらかわざとらしいところがあった。かれは、まだ性交を経験しておらず、女性の胸や腰の魅力を充分に堪能していた訳ではない。それなのに、かれは、さきの感想のなかで、それらに堪能して、脚に魅力をおぼえている自分を演出しているようなところがあった。この気取りは、Aの言動に、青年期をつうじて見えかくれする。

ついでに、Aは、自分自身の性的魅力についてどうみていたか。国民学校時代、かれはけんかがとびきり弱い、いじめられっ子で、いじめをかわすのに精一杯で、自分が女の子にとって魅力的にみえるかどうかなど、かんがえたことがなかった。かれの感情生活の基調は劣等感だけであった。中学校に入り、かれは、両親の知人である成人女性たちの数人から、別々の機会に、かれの容姿を賞められる経験をする。それはおもいがけないことであった。根づよい劣等感は、中学校、高等学校の学業成績が自分で期待するほどすぐれないこと、中学校からはじめたバスケット・ボールの才能がないこと、などによって大学に入るまでつづいた。それは、大学に入ってわずかに中断したが、かれがえらんだ学芸の分野でおもうほどの成果をえられなかったことから、かれの青年期の終りまで、かれの感情生活を支配した。そのあいまに、ときおり、自らの容姿についての自己愛的感情がまじった。

性的愛情にかんする社会化

さきに述べたように、Aは、中学校三年生の夏、同年のひとりの少女にはじめて恋愛感情をもった。この感情の性質を、のちになって分析的にかんがえてみると、つぎの三点が特徴的にみえる。

第一、彼女の存在はかれにとって、かけがえがなく、最初で最後に出逢った価値だと感じられた。ヴィクトル・フランクルが『死と愛』やそのほかの著作で展開した実存分析の理論のタームでいう独自性と一回性の価値を、かれは彼女に感じた。自分にとって、彼女はなにものにも変えがたいと、Aはかんがえた。かれは、夜、自室で、空想をして、ある邪悪な力に彼女とかれがとらえられ、いずれかの生命がうばわれることになった場面をおもいうかべ、そこで、かれが、なんのためらいもなく、自分を殺せと申し出るのを確かめた。かれは、自らの臆病さとエゴイズムをよく識っていた。そして、なるほど、ひとを恋するということは、自分のようなものにでも、このような自己犠牲の感情をうむのかと感じいった。空想がさらに進んで、その少女か親か弟妹のだれかかという選択がせまられ、かれは困惑した。かれは、両親や弟妹をもとても愛していたので、その選択では決断をすることができず、辛くて、涙をながした。

第二、彼女は女性として魅力的であった。Aは、彼女の顔だちを美しいとおもい、その服装、動作、喋りかたなどを優雅に感じた。彼女は、

遠くの土地から、そのころAが住んでいた土地に移り住んできたのである。その遠くの土地は、Aの母親が少女時代を過した場所であった。少女の喋りかたのなまりは、Aが、母親の喋りかたでときおり聞いていたものであった。これから判断すると、Aの彼女にたいする恋愛感情には、エディプス・コンプレックスがなにほどか投影していたのかもしれない。Aが、海岸で水着姿の彼女にあい、透けてみえる胸部の美しさに目を撲たれたように感じたのは、さきに記したとおりである。かれは、彼女の性的魅力にひきつけられていた。

第三、しかし、Aは、彼女を、マスタベイションのさいの空想のなかに登場させることがなかった。それどころか、かれは、夏に彼女と出逢い、親しい交際をしたのち、夏の終りに彼女がかつて住んでいた土地に一時的に戻ったとき、彼女と交際をしていた四〇日ほどのあいだ、かれがマスタベイションをしていなかったのに気が附いた。恋愛感情に心理的エネルギーが大量に動員されてしまい、性欲が忘却されていたのである。マスタベイションの習慣はまもなく戻ったが、Aは、彼女を性交の相手として想像したことがない。

記憶するかぎりでは、Aは、そのころ、性交を罪悪視する価値意識から抜け出そうとしながら抜け出しきっていなかった。そのため、恋する相手を性交の相手として想像することができなかったのであろう。しかし、これは、性交の相手と恋愛の相手を別々にかんがえるという結果となり、しかもそれが、のちに述べる事情でながく固定化されることになり、Aの性的社会化に大きい影響をもつことになった。

Aとその少女との恋愛関係は、Aの側からいうと、かれがその感情をもちながら、それを口には出さず彼女と親しく交際する期間が一年ちかくつづいた。翌年の初夏、Aは、その感情を彼女に告げ、うけいれられる。かれらは、成人したのち結婚しようと約束した。しかし、得恋の期間はきわめて短かく、やがて、彼女は、その約束はできないといい、かれの恋愛感情をうけいれないし、交際もうちきりたいと伝えてきた。彼女は、かれとの間柄を彼女の父親にすべて喋り、驚いたかれの指示にしたがったのだということであった。かれは失恋し、親許をはなれて、東京での下宿生活に入った。

それが、Aが高等学校一年生、一五歳のときである。そののち、Aの彼女にたいする恋愛感情は二三歳まで持続した。かれは、高等学校時代から大学時代にかけて、福岡市から列車で二時間ほどかかる村落の親許へ休暇で帰省するごとに、彼女が住んでいる福岡市に出かけてゆき、その友人の宅に泊めてもらって、彼女に近づこうとした。かれは、かれなりに礼儀正しくふるまったが彼女はそのたびにかれの申し出をてきびしく拒んだ。高等学校時代、ひどい侮辱ととれる拒みかたをされて、かれはつよいショックをうけ、親許にひきあげてから、まったく食欲を失って数日をすごしたことがある。

かれの愛情がうけいれられる見込みはありそうになかった。このような状況のなかで、かれは、性交の体験をのぞみ、愛情をともなう性交の理想にたいしてシニカルな態度をとるようになり、性交を即物的におとしめてみる見方を身につけていった。それは、かれにとって、一種の自己正当化の試みであった。

Aは、一年ほど、彼女にあいたいという申し出をひかえたのち、二三歳のとき、先述の友人をつうじて、彼女からあいたいという申し出をうける。かれは、友人といっしょに彼女にあい、彼女からそれまでの態度についての釈明をきかされた。八年ぶりにあう彼女は、魅力のかがやきを失って平凡な娘になっていた。Aは、真物の彼女の、いろが褪せた模写をながめるように彼女をながめていた。その後、まもなく、かれは彼女の父親から娘と結婚してほしいという手紙をうけとり、それに礼儀正しい断わりの手紙をかいた。かれの、少年時代から青年時代をつうじてのたった一度の恋愛は、こうして終った。　　〈この事例終り〉

〔筑波大学教授　本学非常勤講師（社会学）一九七九―八二年度
総合研究一（子どもの社会化過程に関する比較文化的研究）研究協力者〕